

中央教育審議会の関係分科会・部会における意見概要
(新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ関係)

1. 教育課程部会 (第120回) (令和2年9月24日)

- 各高等学校におけるスクール・ミッションの再定義、スクール・ポリシーの策定が、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを行うに当たって重要になるということで、これが全国の高等学校に広まることを期待している。一方で、現在、各高等学校では新学習指導要領の実施に向けて、必修科目と選択科目をどのように教育課程として組み立て、位置づけるかという教科・科目の内容の扱いに関心があり、それぞれの学校の生徒について、3年間でどのように資質・能力を育成すべきかというカリキュラム・マネジメントの考え方になかなか至っていないという傾向がある。
- 高等学校の入学を許可するに当たって、特に公立学校における入学者選抜試験は、現在も多くの県が統一問題によって行われている。私立学校では各学校で入学者選抜試験を行っていることも踏まえ、スクール・ポリシーに即して各学校独自の出題をすることを公立学校でも検討する時期に入っているのではないか。
- 普通科高校、専門高校という部分は今後も適正な区分かということを検討してほしい。普通科高校がスクール・ミッションを明確にすることとなるが、専門高校も今までの農業、工業、商業という産業区分ではなく、SDGsのように価値区分にしたほうが、生徒の目標設定や、思考力・判断力を高めることにつながると思う。
- 専門高校に進学する生徒は、15歳の時点で自分の進路を決めるが、進路を固定化することなく転学が可能なカリキュラム・ポリシーや、入学の間口を広く取るアドミッション・ポリシーの設定、卒業時のグラデュエーション・ポリシーで卒業を厳格にするなどが必要ではないか。
- 「卒業の認定に関する方針」という用語は定着しにくいのではないか。高等学校がグラデュエーション・ポリシーといったときに、卒業の認定を指すとなると、卒業の単位数や科目の履修、習得ということになってしまうのではないか。例えば卒業時の

生徒像、こういう生徒として卒業させていくという意味合いが分かる用語にしてほしい。

- 新たな学科の生徒の卒業後のイメージはどのようなものか。例えば大学が新たな学科の生徒を受け入れる環境、制度を組み込む必要があるのではないか。
- 現状の多くの中学3年生が自信を持って進学先を選択できるかという点、現状ではギャップがあるのではないか。多くの中学生が、何をしたいが明確ではないから普通科を選択しているというのが現況であるため、高等学校の普通科の多様化を進める上で、中学校からの接続についても手立てが必要である。
- 高校教育を豊かなものにする試みは大変重要であるが、大学入試の場で豊かな学びが評価されないことでは、高校教育が硬いものになってしまっているというのが現状ではないか。学習指導要領も変わったため、豊かな学びをした生徒たちが大学に入学できるルートについても考えるべきではないか。

2. 初等中等教育分科会（第127回）（令和2年9月28日）

- 中間まとめには、ここで書かれている取組を実現していくための教育行政の在り方についての言及が必要である。学校現場で進めていくための教育行政の在り方として、一つは内向きで縦割りの教育行政から社会に開かれた教育行政・ネットワーク型行政への転換が必要である。組織横断的に、多様な主体と協働していくマネジメント体制や、外部人材の活用に取り組むことがこれからの教育行政には必要である。

二点目は、管理指導型の教育行政というところから、伴走支援型の教育行政への転換が必要である。一律に全ての学校・地域で同じやり方、考え方だけではなく、各学校や地域ごとの個別最適な対応の必要性を行政側も意識することが重要である。また、学校に何かをさせようという発想から、学校が主体的に取り組むことをどのように伴走支援していくのかという発想に変わらなければいけない。

- 高校生の学習意欲を喚起するという観点からは、高校卒業後の将来の未来の描き方、キャリア教育も重要である。スクール・ポリシーのうち、卒業の認定に関する方針につ

いては、単位数や科目履修に限定された形になってしまうのではないか。卒業後も含めた、高校生の将来の未来を見据えた観点が必要ではないか。

*上記内容は、委員の了解を取っておらず、事務局がまとめたものである。